

# 旅行——ゲオルク・フォルスターの一形成要素 (I)

中 村 皓 光

1

今日ゲオルク・フォルスター (Johann Georg Adam Forster, 26. 10. 1754~10. 1. 1794) の名は、紀行文『ニーダーライン地方についての見解』(Ansichten vom Niederrhein, 1791~92) の著者として、ドイツ文学史の一隅に記されるに過ぎない。また、その著作、書簡、日記などの全貌に接することは困難であり、彼に関する研究文献もほとんど世に出ない。歴史主義の普及も再発見・再発掘の流行も、この人物を見捨てて通過して行くように思われる。しかし、彼の著作が発表当時ゲーテ、シラー、リヒテンベルクなどの人々から高い評価を受けたという事実、そして同じ人々が晩年の彼の行動に手ひどい非難を浴びせるに到ったという事実は、すでにそれだけで何事かを暗示する——、つまり、再評価の試みに十分値いすることを語っているのである。私が目にし得た限りの僅かな資料によっても、フォルスターは極めて多面的な才能と激情的な性格との持主であったと推察される。最初のドイツ人世界一周者、博物学者、インド文学の紹介者、批評家、旅行記作者、急進的な政治運動家——フォルスターのこうした万能性と、彼がどの分野においても輝かしい業績を挙げて出発しながら決して徹底しようとはせず、常になにか気まぐれじみた仕方で方向を転じて他の分野に飛び込んで行く、その無完結性とは、啓蒙主義と古典主義とロマンティックとが互いに影響し合いながら同時に存在し得た18世紀後半という特別な時期の象徴であると思われる。また、あのような時期でなければ、フォルスターのような人物を時代の子として生みながら、しかもなにか時代を超えたところのある形姿にまで育てることはできないであろう。

田舎牧師の子としてプロイセン＝ポーランドの一寒村に生れてから、追放を受けた叛逆者としてパリの屋根裏部屋で貧困と孤独のうちに息をひきとるまで、フォルスターの40年にも満たぬ生涯には定住ということが欠けている。言葉のあらゆる意味において、彼は一生を通じて旅人であった。神学よりも地理学と博物学に関心を寄せていた父親の助手として、10才の少年フォルスターはロシアに向い、ヴォルガ河の流域を、キルギースの荒野をさまよう(1765年)。牧師業に見切りを付けたこの父親はやがて息子を連れてロンドンに向い、自分の好む分野での職を求める(1766年)。1772年、ジェイムズ・クックが第2次世界一周航海に出発したとき、フォルスター父子は博物学者として同行する。1775年までかかったこの大航海での体験と見聞を記述した処女作『世界一周航海』が、ようやく少年期を脱したばかりのフォルスターを一挙

に有名人に仕立てあげてしまう。

若いフォルスターを旅行に連れ出し、指導し、監督した者は、このようにいつも父親であった。息子よりも長生きすることになるこの男は、博物学と外国語の教師として息子に多くのものを与えはしたが、反面では精神的圧制者・経済的圧迫者として息子からさらに多くのものを奪い取るエゴイストでもあった。周囲の人々と衝突を重ね、家族をこき使い、家計のやりくりには無関心であり、しかも好むがままに浪費を続けるという、鼻持ちならない人間だった。元来彼の仕事として予定されていた航海記を息子が代って執筆したのも、頼りにならない父親に代ってなんとか収入を図る必要があったからなのである。後にフォルスターがドイツ本国へ帰ってからも、父は子を困らせ続ける。1784年の春には、ポーランドへの旅路に着いたばかりの息子を途上に待伏せて、乏しい旅費のなかからいくらかを捲上げたりもする……。

フォルスターがカッセル、ヴィルナ、ゲッティンゲン、マインツと居を移し、大学教授、図書館司書、政治家と職を転じて不安定な生活が続けたのは、フリードリヒ・シュレーゲルが言うように「旅が彼の学校であった」からばかりではあるまい。それは幼ない頃からの旅行生活の習慣でもあり、父親の激烈で落付かぬ性格が遺伝し、影響したものでもあろうが、さらにフォルスター自身のなんとか父親の影から逃れ出て、真に独立の個人になろうとする意志の表れ、一種の自由への逃走でもあったろう。そこで、旅人としてのフォルスターを論じようとすれば、どうしても彼の父親のことに触れなければならなくなる。

## 2

フォルスターの家系をさかのぼってゆくと、最後にはバルト海を西へ航海することになる。彼の先祖はポーランド人でもドイツ人でもなく、スコットランド人であるが、16世紀にはイングランドのヨークシャー地方に移っていたらしい。しかし、17世紀に入ってチャールズ1世とイギリス議会とが激しく対立し始めると、フォルスター家は海を越えてポーランドへ移住する。1630～1640年代には、チャールズ1世の徹底的無議会政治とスコットランド圧迫を、さらにイギリス革命の動乱を逃れようと、多数のスコットランド人がポーランド（主にダンツィヒとその周辺）へ亡命しているが、そのなかにジョージ・フォスターという名が見え、1642年以降ヴァイクセル河畔のノイエンブルクに商人として定着した。当時ダンツィヒとその周辺はバルト海貿易の中心地であり、ポーランド内陸部の物産がイギリスへ輸出される際には、必ずこの港町から積出されたのである。

中世以来、ダンツィヒ一帯には多くのドイツ人が住みついていた。彼らはドイツ騎士団が崩壊した後もこの地方に留まって、商業・海運・手工業などの分野で活躍するとともに、都市にドイツ的様相を与えた。彼らは指導的階層の構成者として、ポーランドの政界や官界において

(1) Vgl. Schlegel, S. 82, Z. 4～10.

(2) ポーランドの地名はすべてドイツ語読みとした。

も重要な地位を占めていた。一方、スコットランド人やイングランド人たちも住民の一部をなして、故国との貿易に携わっていたのである。ダンツィヒには英国国教会があり、説教は英語でなされていたという。

そんな雰囲気の中、商人フォースター一族は急速にドイツ化し、同時に上流階級化していった。例えば彼の息子アダムはディルシャウの市長に選ばれ、アダムの息子ゲオルク・ラインホルトはドイツ人を妻とした後（ゲオルク・ラインホルトの妻は市長令嬢である！）、やはりディルシャウの市長職に就いている。このゲオルク・ラインホルトの息子ヨーハン・ラインホルトが、われわれの旅人の父なのである。

ヨーハン・ラインホルト・フォルスター（Johann Reinhold Forster）は1729年10月22日にディルシャウで生れた。1735年に父親が卒中の発作を起して、公職にも子供の教育にも耐えられなくなったので、ヨーハン・ラインホルトは母方の伯父に預けられ、その領地で農業の実地を経験しながら数年を送った。小学校へ入学したのは1743年になってからのことである。しかし、彼の才能と進歩には人目を惹くものがあつたに違いない。なぜなら、1745年に彼はベルリンのヨーアヒムスター・ギムナジウムに入学しているからである。大学入学資格を得るためならダンツィヒでも済むことである。

少年ヨーハン・ラインホルトがギムナジウムで熱中したのは外国語だった。大学入学のための古典語のほか、数々の近代語、さらにコプト語までを教師や留学生から学び取った。後年彼は17箇国語の知識を有するようになり、そのことを誇りにしたと言われる。1748年にはハルレ大学に進んだ。父親は彼に神学を専攻させるつもりであつたが、息子は依然として外国語の修得に熱中し、さらに医学と博物学にも関心を深めた。イギリスやフランスから来た留学生たちとの議論は次第に語学修得の域を超えて、この熱中しやすい少年を啓蒙主義哲学の信奉者に仕立てあげた。神学については、まったくお座なりな程度のことしかやらなかったのである。

1751年、彼は突然父親からの帰郷命令を受取る。おそらく父親は、息子が神学の勉強をなござりにしていることを聞きつけたのであろう。また一家の経済的事情もからんでいたであろう。なぜならフォルスター一家はディルシャウからダンツィヒに移転していたし、父親の病気はますます重くなっていたからである。帰郷したヨーハン・ラインホルトを父はダンツィヒの改革派教会付説教師に世話した。有力者だった父の名前と、生来の激情と雄弁とが、不十分な神学の知識をなんとか補った。だが、好まぬ仕事を無理やり押付けられたという不満は絶えず彼につきまとう。教会の仕事になんの天職感も使命感も抱くことができず、逆に父親によって自分の将来をだいなしにされたと感じていた彼は、上司との争いを繰り返すようになった。1753年、父親はダンツィヒ近郊の寒村ナッセンフーベンの牧師職を息子に見つけてやり、その直後に世を去った。こうして短気な息子は自分の保護者を失ない、生活のためにはやはり牧師業を続けざるを得なくなる。ナッセンフーベンでの生活は、少なくとも牧師としては、なげやりなものだった。前夜にならなければベンを執らない彼の説教は回を経るごとに陳腐なものになってゆき、領主には軽んじられ、農民たちからも理解されない。彼はますます怒りっぽくなり、

朝から晩までハルレ時代の愛好課目——外国語・博物学・歴史・哲学——に没頭する。1754年の初めには従妹の一人と結婚したが、家計には無頓着に高価な書物を買ひあさる。同年11月26日妻は長男を生み、その後43年間この暴君との共同生活を耐え忍ぶ。長男は12月5日に父親の手から洗礼を受け、ヨーハン・ゲオルク・アーダムと命名された。これがわれわれの旅人である。

ヨーハン・ラインホルトは領主と農民の間にはさまれて、あしかけ12年間の不満な生活をナッセンフーベンに過さねばならなかった。領主への奉仕も農民の教化も彼にとっては癩の種以外のなにものでもなかった。彼は牧師の努めを怠って動植物の採集に熱中するばかりか、月に200ターラーにしかならぬ収入のことは考えに入れず、書物と標本の購入に浪費してしまう。浪費は彼の一生を通じてやむことのなかった悪癖であって、父と伯父の遺産はこの時代に一文残らず使い果されてしまった。かさむ借財はダンツィヒの教区民の募金によって何度か清算されたが、このことは同時に彼の昇進と転任の可能性を奪う結果にもなった。1754年から1765年の間に男女7人の子供が生れているが、そのうち誰一人として正規の教育を受けた者はいない。領主と自分たちを除けばポーランド農民ばかりの村に、もちろん教育施設はなく、さりとて子供たちをダンツィヒに送ることは家計が許さなかった。妻は多産と心労のあまり病気がちになっていたし、領主もこの無能でありながら傲慢で、ことごとく自分と対立する田舎牧師の家庭の面倒など見ようとはしなかった。領主にしてみれば、彼を追放せずにいることはキリスト教徒としての大きな慈悲だったに違いない。

子供たちの教育にあたるべきものは、結局父親しかいなかった。彼は長男ゲオルクに外国語と博物学を教えたが、その仕方は当然考えられるように気まぐれで、むやみに手きびしく、内容もバランスの取れていないものだった。後年この生徒は自分に基礎的教育が欠けていることと、父親の教育法になんの原則もなかったことを嘆くようになる。ゲオルクは生徒であるだけでは済まされなかった。父親は長男を助手代りに動植物採集に連れ出し、コレクションの整理をさせ、他の子供たちの授業にあたらせたのである。こうしてゲオルクは誰よりも父の趣味に影響され、また父の激しい叱責を浴びることになった。ゲオルク・フォルスターの多面的な才能と生産、その反面見られる不安定な情緒と持続性の欠除は、すべてこの父親から与えられ、強められたものでなければならない。いずれにせよ、父親は長男の才能と仕事ぶりから相当な満足を得ていた。なぜならヨーハン・ラインホルトは1765年3月、ロシア政府から依頼されたヴォルガ河流域植民地の調査旅行に、10才になったばかりのゲオルクを助手として帯同するという非常識を敢えてするからである。

3

フォルスター一家のナッセンフーベン時代（1753～1765）は、ちょうど七年戦争（1756～1763）の時期に当たっている。ダンツィヒとその周辺は13世紀のドイツ騎士団進出とその植民以来、バルト海沿岸の重要地点として各国の争奪の的であるが、この時期にもその例外ではあり

得ず、女皇エリザヴェータ治下のロシアに占領されている。このことも父フォルスターの瘡の虫をつのらせ、一家の生活を窮迫させる原因になったであろう。彼の生涯は上司との衝突の反復であるが、七年戦争の最後の冬には占領軍ともいざこざを起している。占領軍はポーランド農民に対して暴行と掠奪の限りを働らき、市民に対しては金品と宿泊施設の提供を強請するのが常であった。父フォルスターが最後の不動産を売却し、さらに蔵書を手離し始めるのもこの頃である。

1761年の末になって、ダンツィヒ地方の事情は好転する。女皇エリザヴェータが死に、ドイツ生れのピョートル3世がロシア皇帝となったからである。彼はプロイセン国王「大」フリードリヒ2世の崇拜者で、即位後直ちにプロイセンと休戦、さらに同盟を結んだ。彼の暗殺後帝位に就いた(1762年6月)妻エカテリーナ2世も七年戦争には中立の態度を堅持し、またフリードリヒ大王と結んでポーランドの王位をめぐる内紛に干渉する。プロイセンとロシアの提携のおかげで、フォルスター家の居住地にも一応の平和が訪れた。ロシア軍は撤兵し、ダンツィヒにはエカテリーナ大女皇の公使フォン・レービンダー大佐が駐在する。この公使は名前からも推察できるように、アンナ女皇以来伝統的にロシア宮廷に仕えていた多数のドイツ人官吏の一人であった。彼はやがてナッセンフーベンの牧師と知合うようになる。

ヴォルテールやディドロなどのフランス啓蒙主義に強く影響されていたエカテリーナ大女皇にとって、自国の広大な国土を開発することは、国家組織の再編成とともに極めて重要な事業であった。即位後間もなく彼女は西欧諸国から植民することを計画した。高級官吏や芸術家はそれまでも多くロシアに住み着き、それぞれ職を得ていたが、労働者を移住させることは一度もされたことがなかった。彼女が移民して来るように呼びかけた相手は、主としてフリードリヒ大王のプロイセンであった。ドイツ生れの大女皇にしてみれば、ドイツ農民の気質はよく判っているし、七年戦争の打撃からまだ回復しきっていないプロイセンから人口を流出させられれば、手ごわい競争国をたくみに弱体化することが可能になり、併せて自国の発展に役立つというものであった。彼女の熱心な呼びかけにも拘らず、移住して来る者はほとんどいなかった。大部分のドイツ人にとって、ロシアははるか東方の野蛮国にすぎず、途方もなく広い未開の荒野としか思えなかったのである。しかし大女皇は自分の計画を捨てようとはせず、首都に専門委員会を設けて移住者の受入対策や開拓すべき土地の調査を検討させていた。

牧師フォルスターの自然科学上の知識を認めたロシア公使が、彼にエカテリーナ大女皇の移民・開拓計画の話を聴かせたとき、牧師は確かに熱狂したに違いない。公使は彼に、ペーテルスブルクまで行ってこの委員会の活動に協力するように提案し、貧困と孤独と不満のうちに12年間も田舎暮らしを過してきた牧師は、このチャンスを逃がさない。それは自分の愛好する分野で自分の名を挙げる機会でもあり、同時に莫大な謝礼金を与えられるはずの仕事でもあった。彼の方からロシア側に出した条件は長男ゲオルクを助手として同行させることだけだった。彼の申出は諒承され、1765年3月、1年間の賜暇を得た牧師は10才4箇月の長男とともにロシアに向った。他の家族は無頓着にナッセンフーベンに残されたのである。

ペーテルスブルクでフォルスター父子に委嘱された仕事は、ヴォルガ河中流河畔のサラトフ県に開拓の可能性を探ることであった。原始林と沼沢、藪と荒野がどこまでも拡がり、時には遊牧民のテントや盗賊の小舟も見かけられる右岸の開拓予定地を二人は3月から10月まで歩き廻って、気候・生物・鉱物・地誌などを調査し、記録を取った。父親にとってはキルギース族・カルムック族・バシュキル族の言語調査とか、タタール人の遺物の発見といった思いがけない収獲も得られたのである。調査を終えた父子はペーテルスブルクへ帰還し、父親がまとめた報告書はエカテリーナ大女皇に提出された。この報告書に基いてのことかどうかは不明であるが、やがて大女皇は再度移民を募集し、今度は多数の南ドイツ人がロシアへ移住して来た。事実彼らは、フォルスター父子が調査した地域に入植して、いわゆるヴォルガ・ドイツ人開拓地を築いたのである。

父フォルスターは、ロシア当局が彼の業績を高く評価し、彼自身を開拓委員の一人に任命するものと期待していたが、これは大きな見込み違いであった。当局は彼を忌避し、委員に採用するどころか調査の謝礼すら支払おうとはしなかった。<sup>(3)</sup>無益な抗議と請願のために、彼らはさらに数箇月間ペーテルスブルクに留まらざるを得なかった。父子のこの頃の生活には援助者でもいたものか、ゲオルク・フォルスターはペーテルスブルク滞在中に、生涯を通じて最初で最後の学校教育を受けている。同地に在住するドイツ人子弟の教育のために、地理学者ビュッシングによってペトリ学校という名の実科学校が建てられていたので、ゲオルクはそこでロシア語を初め数学・政治学・経済学などの手ほどきを受けることができた。これらの分野は人間生活との直接的関連において、終生彼が熱心に携わったものである。しかし、父の苦境は息子に学校生活の喜びを長期にわたって味わせてやることができなかった。ロシア政府は結局フォルスター父子に何らの報酬も与えず、彼らは深く失望して郷里へ向った。これがゲオルクの最初の旅の顛末である。

ロシア旅行の体験を通じてゲオルク・フォルスターは二つの事を学び取ったに違いない。簡単に言えば、それは実践科学者としての方法論の獲得であり、また国家・社会・人間に対する批判精神の芽生えである。調査旅行の目的から考えて、父フォルスターの研究は人間・自然界・風土・歴史の相関関係の発見に重点を置き、人間生活の向上のためにその具体的な応用法を考案するといった内容のものであったろうが、ゲオルクは当時すでにカール・フォン・リネーの『自然の体系』を採集の手引書に使えるほどの早熟な才能を示していたし、父の忠実で勤勉な助手でもあったのだから、父の研究態度をおのずから身に付けてしまったことは十分に考えられる。自然界を客観的に観察し即物的に記述するだけでよしとはせず、常に人間や社会との関係において考察するゲオルク・フォルスターの態度は、処女作『世界一周航海』(A Voyage round the World, 1777; Reise um die Welt, 1778~80) から晩年の名著『ニーダーライン地方についての見解』まで一貫して不変であるが、その基礎はロシア旅行中に定められたと言っ

(3) サラトフ県知事の妨害工作があったものと推測される。Vgl. Dove, S. 167; Kersten, S. 18; Steiner, S. 1020.

てよい。そして、この種の研究態度が自然界に向けられるだけでなく、旅行中に会おうさまざまの異民族の生活文化にも適用されるならば、それは見聞と知識を深めるばかりか、省察を通じて少年フォルスターの人間と社会に対する批判精神を育成し、同時に彼の自己形成にも資するはずのものである。父フォルスターがペーテルスブルクで政府当局から受けたひどい処遇などは、『世界一周航海』の随処に読み取れる若々しい正義感の発展に明らかに作用しているし、後年書かれる社会批評や政治批判の鋭利さにも、なお影響を続けていると思われる。

4

1766年、苦難と困窮のロシア旅行から帰って来たばかりのフォルスター父子は、自分たちがもはやナッセンフーベンに住む権利を失なっていることを知らされる。彼らの帰国が予定よりも遅れたのを理由に、村の領主が牧師職を父フォルスターから取りあげ、他の牧師をすでに招いていたのである。残されていた家族たちも同じ理由で牧師館から追立てられて、ダンツィヒで細々と暮していた。父が長年にわたって集めていた貴重な書物は、当然のことだが売食いの種になってしまっていた。父がこの事件に対して示した反応は、ロシア旅行を企てたときと同様、急激で見境のないものだった。彼はまたしてもゲオルクだけを連れてイギリスへ渡ることを決意したのである。彼がゲオルクだけを選んだ理由は、ただ推測するほかはない。おそらく前途の見込が薄いこと、ゲオルクがなにかと役に立つとロシアで実証されたことが、その表向きの理由であろうが、自分の利害だけを考えて、足手まといになる女子供は後に残してもよいとするこの男に特有のエゴイズムも確かに存在したに違いない。こうして妻と子供たちは相変らずの困窮のうちに残され、父親と長男は確かなあてもないまま、1766年6月、ダンツィヒからロンドンへ向って出発する。

ここで、なぜヨーハン・ラインホルト・フォルスターはプロイセンないしドイツ本国を運試しの土地に選ばず、イギリスへ移住したのかという疑問が残る。七年戦争直後のドイツでは生活の苦しさも十分に考えられるとは言え、ヨーハン・ラインホルトのような仕事をする者にとっては、同じ母語を使用することがなによりも重大な理由になってよいであろうに。しかもプロイセンは今や強大な国家であり、フリードリヒ大王は農業を重視している。博物学者フォルスターにふさわしい職と地位くらいは見つけられそうなものである。

おそらくこの移住者の心のうちには、さきのロシア旅行によって強められた、未知の国土への憧憬と好奇心とがひそんでいて、それが彼をイギリスへと向わせたのである。ドイツ本国は青年時代の遊学を通じてすでに彼の知るところであった。病気の父親の命令で去らねばならなかったことから、ある意味でドイツは彼のルサンチマンの対象であり得た。フリードリヒ大王の専制政治も、ロシアでの不愉快な体験と併せ考えると、彼のような性格の人間にとってはまったく好ましくないものであったろう。だからこそ彼はポーランドもプロイセンも見捨てて、「先祖の故郷、議会君主制と市民的自由の国土において、自身の愛好するところと才能と市民

的見解にふさわしい生活を発見するべく<sup>(4)</sup>、バルト海を渡ったのであろう。

ヨーハン・ラインホルトのイギリスでの生活は、まずまず幸運な滑り出しを見せる。到着した年の11月にロンドン考古学協会でラテン語の講演を行い、12月には王立美術協会と連絡を取っている。前者は翌1767年1月彼を名誉会員に選び、6月にはロンドン王立協会が彼の講演を求める。自然科学者としての名声は次第に高いものとなり、同年7月、ランカシャー州ウォーリントンの非国教徒アカデミーから、化学者プリーストリーの後任として招かれ、ドイツ語、フランス語および博物学の教授となるに到る。地理学・農学・動物学・植物学・鉱物学・考古学など広範な分野にわたって彼は著作を続け、英米のすぐれた学者との接触も日増しに多くなって、彼の成功は疑いないものと思われた。収入の安定と増加のおかげで、彼はダンツィヒから家族を呼び寄せることもできた。一家は2年ぶりにいっしょに暮すようになったのである。

一方ゲオルク・フォルスターの方は、極端に苦勞の多い生活を続けた。ロンドン到着の直後から、父子二人の生計を立てるために働かねばならなかったのである。語学の生徒を取ったり商店の勘定係を勤めたりしながら、彼は初めて自分の名で公表されるはずの仕事に精を出す。1767年5月21日、「本協会」(ロンドン考古学協会)「名誉会員フォルスター氏の令息にして、まだ13才にも満たぬのに数箇国語に精通せる一少年紳士が、自らの英訳になる一冊の書物を寄贈された。その標題は『簡約ロシア年代記。枢密顧問官兼ペーテルスブルク科学アカデミー化学教授ミハイル・ロモノーソフ著のロシア語原典より訳出。訳者により現代史の部を追補』である。この少年紳士の好意ある寄贈に対し、感謝の言葉が送られた。」<sup>(5)</sup>

ゲオルク・フォルスターは、航海期間を加算しても一年そこそこの間に、非常な勢で英語の力を身に着けたに違いない。この仕事に父親の助力があったとしても、ゲオルクの才能の豊かさを疑うことはできない。たとえ完全に全部ではなくとも、ほとんどの仕事はゲオルク個人の力でなされたのだと、私は推測したい。なぜなら、この時期のヨーハン・ラインホルトは自分の名前をイギリスの学界に売り出そうと夢中になっていたのだから、学問の分野で挙げた業績を隠したり人にゆずったりするはずがない。彼にとってゲオルクは、思いのままに酷使できる無給助手でしかない。息子にさせた仕事を自分の名で発表しても、ヨーハン・ラインホルトは決して不自然とも横暴とも思はなかったであろう。ゲオルクの名を公けにすることを認めた裏には、なにかその方が有利になるような事情があったに違いない。(フォルスター研究者ゲルハルト・シュタイナーは、英語の文体に対する感覚の繊細さという点で、子は父をしのいでいると言う。父親の講演や寄稿がラテン語でなされているところを見ると、父親は英語の拙さを自覚していたのであろうか。)<sup>(6)</sup> ゲオルクはその後父親との共訳の形で、さまざまな訳書を世に

(4) Steiner, S. 1021.

(5) Society of Antiquaries of London, Minute Books, X, 347. ただし Kahn, S. 679 より再引用。

(6) Vgl. Steiner, S. 1021 u. 1026. アメリカ人 Robert L. Kahn は Johann Reinhold Forster の英語に欠点の多いことを指摘している。Vgl. Kahn, S. 692.



送っている。

フォルスター一家の生活の安定は、父親の狷介な性格のために、またしても短期間で終わってしまった。ウォーリントンの非国教徒アカデミーでヨーハン・ラインホルトが担当している外国語の授業については、その無味乾燥さが悪評的となり、アカデミーの上層部と例によってトラブルを起したこともあって、父は僅か1年間勤務しただけで教授の席を捨てねばならなくなった。やむなく彼は同地の神学校で教えたり、場合によっては外国語や戦術論(!)の個人教授をしたりして、口を糊せねばならなかった。家族のすべてが、わけても有能なゲオルクが、内職で家計を助けたことは言うまでもない。父親の稼ぐものが家族に分配されることは、まずなかったのである。1770年秋に一家はロンドンへ移っているが、それは父親が貿易業者兼地理学者のアレクサンダー・ダリムプルの勧めに応じて、東インド会社に勤務する計画を抱いたかららしい。この計画は実行されなかったが、依然として父親はゲオルクを助手に使って——息子はすぐれた画家として、父親の著書の挿絵のすべてを担当している——、自分の愛好する仕事を続け、いわば家族を犠牲にし続けたおかげで、ロンドン王立協会の会員に選ばれた(1772年2月27日)。同年出版された父子の共訳書にルイ・ド・ブーガンヴィユの『世界一周航海記』があるが、これは当時次のような書評を受けている。

「ド・ブーガンヴィユ氏の航海物語にあれほど巧みな挿絵と立派な註釈とを加えた人物は、同じ種類の探險に際して三執政官の一員となる資格を、誰にもまして与えられねばならぬ…」(The Critical Review, XXXIII)<sup>(7)</sup>。他の2人の「執政官」とは、ジェームズ・クックの第1次航海(1768~1771)に参加し、この年に行われる第2次航海にも同行を予想されている植物学者ジョウジフ・バンクスとダニエル・カール・ソランダーのことである。

## 5

当時のイギリスは、海外への進出と植民地の獲得・整備・経営を最も精力的かつ組織的に実行する時代にあった。すでに200年前のエリザベス女王朝において、東西の海洋は国家の後押しを受けるイギリス海賊の活動の場であった。ドレイクやローリーといった名は、われわれの耳にも親しいものである。1600年には東インド会社が設立されている。1689年の名誉革命と権利章典の発布によって、この国の資本主義的発展の土台は強固に堅められた。西インド諸島の砂糖、北米南部の煙草、東インドの香料が、本国に莫大な富をもたらす。18世紀に入るとイギリスの植民地は北アメリカと西インド諸島のみならず、インドの大部分と西アフリカにまで及んだ。ロバート・クライヴによるインドの完全支配は、当時のイギリスの海外政策を象徴している。

しかもこの国では、精密科学が同時に発展してきた。チャールズ1世以来歴代の国王は、政治家としてはどうであったにせよ、すべて科学の保護者であった。名誉革命以後もこの伝統は変らなかった。むしろ市民の権力によって、科学はさらに発展を続けた。なぜなら天文学と地

(7) Kahn, S. 678 より再引用。

理学と数学は航海術と結びつき、博物学は国外の物産と結びついて、海外進出と植民地貿易という至上の国策に直接貢献するところが大きいからである。このようにして、16世紀においては計画性に乏しい海賊の冒険と掠奪に過ぎなかった遠洋航海は、2世紀の間に本質的な変化を示す。国策を遂行するための基礎として、国家的規模を持った学術探險が行なわれるようになったのである。(その代表的な例は、新たに発見されたタヒチ島で金星の太陽面通過を観測するために派遣されながら、併せてニュージーランドを調査し、オーストラリアを領有するに到ったジェイムズ・クックの第1次航海であろう。) 未知の国への関心がこれほど強い時代は他にない。帰国した航海者はスター扱いされ、夢のような話を満載した航海記がなによりも愛読される時代であった。

1772年、オーストラリアの南方に実在すると考えられる未知の大陸を発見するためクックを第2次航海に派遣するに際して、イギリス海軍省はフォルスター父子を専属の博物学者として参加させた。バンクスとソランダーは乗船の設備と安全性の点でクックと意見を異にしたので、同行を中止したのである。この両者の代りに父フォルスターを海軍省に推薦したのは、おそらく王立協会副会長のバーリントンだったであろう。父フォルスターは例によって、ゲオルクを同行させることを条件に持出し、当局もこの申出を諒承した。7月13日、クックの乗船レゾリュション号と僚船アドヴェンチュア号はプリマス港を出帆し、喜望峰から南極海を経てニュージーランド、タヒチ島、イースター島、マルケサス群島をめぐり、ニュー・ヘブリディス諸島、ニュー・カレドニア島、ノーフォーク島を発見するという成果を挙げて、1775年7月30日に帰港した。

ヨーハン・ラインホルト・フォルスターはこの航海に参加するように求められたとき、最初から喜んで承諾したのだった。博物学や地理学の分野で大きな新発見を多量になし得る可能性は彼の研究心を刺激したし、バンクスらが受けた名誉と歓迎は彼の競争心をそそった。経済上の理由もあった。海軍省が提供する4000ポンドの手当は、浪費者の常として借財の多いヨーハン・ラインホルトにとって非常に魅力的だったに違いないし、ソランダーのように帰国後には職と年金を与えられることも期待できた。公式航海記録と学術報告書の執筆は彼の役割と考えられ、その面で海軍省がさらに彼を援助することも十分に予想できた。それゆえ、「バンクス氏が中止したことを聞くや否や、彼は行く<sup>(8)</sup>と申し出た」(クック、1772年6月)のである。実際彼らの博物学上の業績には顕著なものがある。新種の生物の発見だけでも植物260種、動物200種におよび、そのなかには約80の新しい属が含まれている。

クックとその部下たちが帰国後国民的英雄として朝野の熱烈な歓迎を受けたのに反し、ヨーハン・ラインホルト・フォルスターだけは冷遇ないし無視された。彼の受けた名誉といえば、国王夫妻の引見とオクスフォード大学の名誉博士号だけでしかない。彼は航海中に例によってさまざまなトラブルを起していたので、そのことが海軍省の心証を悪くしたものであろう。王立協会の推薦に基いて彼を任命した海軍大臣サンドウィッチ伯自身が、ヨーハン・ラインホル

(8) Kahn, S. 681より再引用。

トのことを「まったく手に負えない人間」だと呼んでいる。当然のことながら、彼の予期には反して、公式旅行記録の著者となる名誉は彼のものにならなかった。<sup>(9)</sup> 帰国後急いで書きあげた原稿は、サンドウィッチ伯によって却下された。ヨーハン・ラインホルトは、出発以前に約束が成立したと信じていたので、執拗に抗議を続けた。これに対して海軍省は、公式記録を2巻に分けてその1巻をフォルスターの学術報告、他の1巻をクックの航海録にあてるという妥協案を提出した。この案にフォルスターもクックも同意し、両者は執筆を開始した。その後の経過は、ロバート・L・カーンによれば次のようなものである。<sup>(10)</sup>

ヨーハン・ラインホルトは、学術報告に加えて公式記録全体の序文をも書くように定められていた。その原稿をサンドウィッチ伯に提出したところ、海軍大臣は王立協会副会長でフォルスター父子の推薦者でもあるパーリントンに命じて、文章を修正させようとした。フォルスターが製作責任者となっていた挿絵用銅版も、彼の担当する巻には使用を認められなかった。これに立腹したフォルスターと上記の二人の間にひどいトラブルが起り、フォルスターが結局一切の権利を放棄しなければならなくなった。クックが担当した巻の校正刷すら、彼には与えられなかった。銅版の引渡しを彼はいったん拒否したのだが、起訴をほのめかす海軍省側の態度の前には降伏せざるをえなかった。学者としてのあまりにも強烈な自負心と極度に刺激されやすい性格が、大臣のかたくなな無理解にからんでこのような事態を惹起したのである。

## 6

父親のみじめな有様に比べると、ゲオルク・フォルスターの帰国後の生はずっとはなやかなものに見える。彼は1777年1月9日に王立協会の会員に選ばれているが、これは22才の青年にとっては考えられないほどの好遇である。その前年には、ベルリン自然科学者協会とマドリッド王立薬学協会の会員に推された。国王にも父親と同時に引見されている（1765年8月16日）。しかし、こうした名誉は一家の家計を支える糧にはならない。父親が公式旅行報告の執筆を事実上禁止され、海軍省との関係が陰悪な状況の下で絶ち切られてしまったことは、そのまま生活苦を意味した。（クックの第一次航海の公式記録を執筆したホークスワースは、その謝礼として実に6000ポンドを海軍省から受取っている。父フォルスターも同じ位の金額を予定していたに違いない。）父子で航海中に集めた記録や資料を使ってゲオルクが『世界一周航海』を英語で書き始めたのは、それ以前の時期と同様一家を養うためだった。2冊本、3巻26章からなるこの大著が、1976年7月から1977年2月にかけて僅か7箇月の間に書きあげられてしまったのも、同じ理由からである。クックの公式記録も同じ頃に着々と進行しており、ゲオルクにはどうしてもその先を越す必要があった。この種の書物は売行きの点からいって、先に出版された方がはるかに有利だからである。執筆に際しては父親の指示や援助もあったろうが、進

(9) Kahn, S. 689.

(10) Vgl. Kahn, S. 691~693.

むにつれてもっぱらゲオルク一人の作業で完成したこの書物は、1977年3月に売出された。(クックの公式記録が発売されたのは、それより一箇月以上後のことである。)続いてドイツ語版が、当時ロンドンに住んでいたドイツ人考古学者ルードルフ・エーリヒ・ラスペの協力によって完成し、1778年から1780年にかけてベルリンで刊行されて、ゲオルク・フォルスターの名声をドイツ国内に広めた。

フォルスターはこの作品の「まえがき」のなかで、彼以前の世界旅行記は現実を伝えるよりも空想によって彩色されたお伽話であるか、実際には旅行に参加しなかった著述家が書斎にこもってまとめあげた半創作品であるか、最上の場合でも、さまざまな事実のあまりにも雑然とした寄せ集めであって、しかも政治的見地から加えられる検閲によってしばしば歪曲されていることを指摘した後、自身の執筆態度を次のように表明する。

「私の考え方に従ってあらゆる期待に応えようとする旅行家は、ひとつひとつの対象を正確に、しかもそれが真実の光を放っているところを観察するだけの公正さを十分に持っていなければならない。しかも、読者に向けて新しい発見と未来の探求への道を切開いてやるためには、それら対象の間の関連を見出して、そこから普遍的な結論を導き出す聰明さをも十分に持っていなければならないことであろう。このような考えをもって私はこの前の世界一周航海に出発し、時間と体力が許すかぎり多くの素材をこの著作のために集めた。私は、いろいろな事件を機縁に生じたさまざまな着想を結び合わせようと、いつも努力した。私がその際意図したところは、人間の天性を能うかぎり豊かに照らし出すこと、精神の足場を高めて、一段と広やかな見晴しを楽しみながらも神の摂理の道に讃嘆しうるようにすることであつた。」<sup>(11)</sup>

フォルスターの目指すところは、この発言によって明らかになる。旅行記といえども深化・精神化——当時の言葉で言えば、哲学化——されなければならない。経験と観察によって獲得された素材の科学的評価は、時代の要請する哲学的認識と緊密に結合しなければならない。この意味において、フォルスターの作品は旅行記というジャンルの革新を意味する。国家の政治的・学術的事業としてなされる大航海という新たな旅行形式が、そして、素材を評価し観察態度を決定するに際して人本的な見地に立とうとする啓蒙主義の時代思潮が、この革新を成功させたのである。

フォルスターの『世界航海』の特色の一つは、交替しながら現れてくる学術的記述と抒情的描写と劇的事件である。しかもこの三者は、まるで独り言のような、いわば自分自身を思索しながら交響的に現実を認識しようとするかのような省察によって、区切られている。22才の青年フォルスターは、この旅行記の執筆を通じて自らの思索力を鍛え、思想的立場を確定しようと試行錯誤を反復しているかのようなのである。『世界一周航海』は、体験としても作品としても、ゲオルク・フォルスターの大学生活なのである。執筆開始にあたって彼を支えたものは、父子が集めた資料を除けば、父親から受けた不規則な教育とそれまでに読んでいた書物だけだった。

(11) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 113.

あとは自分の才能に頼る他はなかった。最初フォルスターは方法や仮説や省察の点で、いまだ新入生の段階にある。しかし7箇月の執筆期間中に、彼は多面的な教養を目指し、自己の個性を意識し、時として撞着におちいるにもせよ、自分自身の思索をこらすように成長するのである。

## 7

フォルスターの観察と思考の中心は、つねに人間とその社会に置かれている。異国の奇妙な人間とその不思議な生活についての報告は、この時代の旅行記に不可欠の要素である。しかしフォルスターの記述には、読者の好奇心を満足させる以上のものがある。彼はどのような人種を観察する際にも、その社会を知ろうと努める。そして、さまざまな社会構成とそれに固有な文化の関連を比較することによって、社会生活の発展過程を体系づけ、その合目的性を発見しようと試みている。この上なく無表情・無感動・不活潑なフェゴ島の野蛮人の姿を見たフォルスターは、完全に自然にゆだねられた状態は果して人間を善に向って進めると言い得るかどうかを考え、ジャン＝ジャック・ルソー流の自然観に疑問を投げる。「われわれは彼らの間に最も僅かな身分の違いもないこと、支配も従属もないことを認めた。」<sup>(12)</sup>そして、「オランダの航海者たちは…、フェゴ島の南岸に住むインディアンは本物の食人種であって、べつに飢えている時に限らず、うまい食事をしたくなればいつでもお互いに殺し合う、と主張する。」<sup>(13)</sup>フォルスターは発展過程の初期段階にある社会構造を、悟性と倫理の成長を促進し、善への実践性を増大させる原動力と見る。しかし同時にその限界をも見落してはいない。気候と食物に恵まれた南方の楽園であるタヒチ島の「住民は、若干の点で昔のヨーロッパの封建制と同様な制度の下で暮している。つまり一人の首長に従っており、しかもエリ、マナハウナ、タウタウの三階級に分たれている。」<sup>(14)</sup>この区別は極めて本質的であるにも拘らず、自然的環境の良好さと生活の簡素さのおかげで、実際の階級差はほとんど存在しないのであるが、「住民のうち上層の連中はすでに下層の連中の負担によって生活している。」<sup>(15)</sup>このような歴史のデュナーミッシュな把握は、フォルスターの航海記を一貫して流れているものである。

彼の発言に民族的偏見が見られないことも、注目されるべきであろう。「地上のあらゆる国民が、私の善意を平等に要求している。そう考えることが私の習性となった。……私が賞讃しようと非難しようと、たとえ名を挙げてそうしようとも、民族的偏見とは無縁のことなのである。」<sup>(16)</sup>とフォルスターは言い、クックによってロンドンへ連れて来られたタヒチ島人オ・マイのエピソードを語っている。英語の発音になじめないこの男が愚者とみなされたことに対し、フォルスターは母音に富むタヒチ語と子音の多い英語の相違をあげて、この種の習慣上の無力を

(12) Ditto, Bd. 3, S. 385.

(13) Ibid.

(14) Ditto, Bd. 2, S. 299.

(15) Ditto, Bd. 3, S. 32

(16) Ditto, Bd. 2, S. 13~14.

弁護する。さらにオ・マイがチェスを巧みに指すようになった事実を指して、この男の思考能力の高さを認める。そして、オ・マイにどんな有益な教育をも施さず、珍奇な見世物としての待遇しか与えなかったイギリス人、南洋諸島へのみやげ物に安っぽい装飾品しか思いつかないクック探險隊は、手ひどく非難されるのである。

ヨーロッパ的精神とヨーロッパ的社会が、全人類の精神と社会のうちで最高度の発展を示すものであることは、ゲオルク・フォルスターの疑わないところである。しかし、彼がヨーロッパ以外の諸民族の生活や社会や特質を観察するとき、ヨーロッパの尺度を直接にあてはめて、その価値を評価し程度を測定するといった態度は見られない。南海の住民の社会構成と生活形式は、それ自体決定的に選択され、形成されたものである。それを暴力的にヨーロッパ化したところで、決して進歩を与えることにはならない。とはいえ、高次の文明はやはり高次の文化と高度の人間性への発展を押し進めるはずのものと、フォルスターの啓蒙主義は考える。それゆえヨーロッパ文明の所産は、他民族の発展段階を十分に考慮しつつ、分け与えられるべきものである。しかもその分与に際して、他民族の独自の状況を妨害するような影響があってはならないとされる。人間と民族の特性は、その自然的環境と社会的発展段階の関連から生れるものであること、道徳や正義といった原理も民族文化の総合的展開として見られねばならないこと、生活形式の相違は決して精神や倫理の程度を示すものではないことを、フォルスターは認識している。だからこそ、先ずヨーロッパ人がヨーロッパの倫理的・精神的・社会的程度を決定的に高めることを、フォルスターは要請するのである。(3.8.1969)

#### テ ク ス ト

*Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe.* Hrsg. v. d. Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, durch Gerhard Steiner, Berlin seit 1958.

Bd. 1: *A Voyage round the World.*

Bd. 2: *Reise um die Welt, 1. Teil.*

Bd. 3: *Reise um die Welt, 2. Teil.*

#### 参 考 文 献

Alfred Dove, *Johann Georg Adam Forster und Johann Reinhold Forster in der Allgemeinen Deutschen Biographie*, Bd. 7, Leipzig 1878.

Kurt Kersten, *Der Weltumsegler. Johann Georg Adam Forster 1754-1794*, Bern 1957.

Gerhard Steiner, *Georg Forsters «Reise um die Welt»* in: *Georg Forster, Werke in vier Bänden*, Bd. 1, Frankfurt a. M. 1967.

Robert L. Kahn, *The History of the Work zu: obengen. Georg Forsters Werke*, Bd. 1, Berlin 1968.

Friedrich Schlegel, *Georg Forster. Fragment einer Charakteristik der deutschen Klassiker (1797)* in der *Kritischen Friedrich-Schlegel-Ausgabe*, Bd. 2, hrsg. v. Hans Eichner, Paderborn 1967.